

新刊紹介

宗教法研究

故下間 空教著

我國の宗教制度は法的に貧しい基礎に立つてゐる、これが學的研究もまた至つて貧しい。この貧困のなかにあつて故著者は理論、實際ともに頼みある存在であつた。それが實に宗教法に關する限り先覺、開拓者、高峰の名に値するものなることは人の知るところである。本書はその學的遺産の集成である。

編纂の組織は

第一篇 宗教法解説

A、宗教法學

B、宗教法釋義

C、宗教法概説

D、宗教法論

第二篇 宗教法草案並同釋義

A、宗教法草案(自第一—至第四)

B、宗教法草案釋義

附

A、宗教法大意 B、僧侶の参政權獲得問題

第一篇は宗教法自體についての組織的解釋に關し、第二篇は同法の立法的領野に屬する諸勞作の秩序的採録である。前者に於ては著者の斯學に於ける學的體系とその發展の過程とが窺はれ、後者に於ては我國の宗教制度確立のための深き蘊蓄よりする高き理想を見ることが出来る。

第一篇中の「宗教法學」は最も學的香り高き中核的勞作と目せられる。その體系の整備せる、これを他の斯學に關する邦書に見ること全く不能であらう。一論の構成を概示すれば、

緒論

總論

第一章 宗教法ノ觀念

第二章 宗教法ノ法源

第三章 宗教團體

第四章 統教權

第五章 治教權

各論

前篇 宗教制度

第一章 一般制度

第二章 我國ノ制度

第三章 各國ノ制度

後篇 宗門制度

第一章 一般制度

第二章 現行制度

附中の「宗教法大意」は我國の現行宗教制度並に寺院制度の通俗解説であり、同「僧侶參政權獲得問題」に於ては各國の制度に及ぶ宗教家の參政事情と我國の獨立的宗教事情に於ける該問題の明快なる論調に接することが出来る。

佐々木惣一博士は本書の「序」に於て著者の宗教法研究に關し「其の所論凡を抜き、實際的にも、又學問的にも、傾聴に値する點が頗る多かつた。天若し君にかすに壽を以てしたならば……」と亡友を嘆じ、「近年我國宗教法の制定計畫され、之が研究漸く盛ならんとするに際し、この好者の出づることは、實際並學問の兩面に於て貢獻する所甚大であると信する」と本書の實質的價值に就て述べておられる。筆者は本書の拙き編者であるから多く言ふことを憚るが、博士のこの文字は素直に受け容れられてよいと思ふ。

(菊版、總四七〇頁、京都、下間空教遺稿刊行會發行、定價參圓五拾錢)〔増田〕

圓頓戒概論

惠谷 隆 戒著

近來日本天台の研究が漸次盛んになり從て著述の公にさるゝものも比較的多く中にも故上杉學長の日本天台史、故島地教授

の天台教學史、佛教大綱等重要なるものである。然るに是等の著述は日本天台全體にわたるもので特殊問題に對しては簡略な點も多々存するわけである。是れに對し本書は圓頓戒についての特殊研究であり今迄の缺點を補ふと共に日本天台教學確立の上に重要な意義をもつものであらう。蓋し圓頓戒は日本天台教學に於ける重要な構成要素を成してゐるからである。即、傳教最後の五年間は特に此の圓頓戒確立の爲に心身を捧げてゐるので所謂眞俗一貫の宗教は此の圓頓戒確立によつて具體化されたと言ふべきである。

さて本書は二篇に分たれ第一篇圓頓戒史要、第二篇圓頓戒要論となつてゐるが著者、自序に述べられし如く第一篇は特に努力を拂はれた様である。第一篇は目次の示めす如く南岳天台以前より徳川時代の圓戒發達史で簡にして要を得たるものと云ふべきである。

即、第一章「圓頓戒成立への推移」に於ける支那天台の菩薩戒思、特にその中、湛然明曠の菩薩戒思想はそれが傳敎の圓頓戒成立の上に重要な意義をもつにかゝはらず今迄餘り論ぜられてならぬ時注目すべき點であらう。

又第四章「安然以後の圓頓戒」第一節「戒系の分裂」はその圖示が極めて便利なる點に於て又第二節「戒法の衰微」は次の時代に於ける淨土教成立の由來を示す點に於て、第五章の「法然上人以後の傳戒」は廣くは淨土教、又は眞宗學を研究せらるゝ人にとつて戒律が淨土教に於て如何に了解せらるべきかを考察する

上に於てそれ／＼注目せられようと思ふ。

然しながら第一章の「南岳の菩薩戒思想」に於いて慧思撰と云はるゝ授戒儀によつて其の思想を論述せられたるは此の戒儀が今日學者の間に偽作として殆ど誤りではないとせらるゝから此の書に對する眞偽を決定の上に論述せられて欲しかった。又第二章に於て傳敎の戒壇設立の直接原因を門弟の離敎にありと論斷せられたる如き學界の問題丈に今一應詳細なる検討を要することと思ふ。

次に第二篇圓頓戒要論は極めて簡單で圓戒の一般的説明にすぎない。如何に概論とは言へも少し著者獨自の見解が欲しかった。殊に「持戒の規範」に於ける攝律儀戒が十重禁四十八經戒の和釋で何等説明のないのはいさゝか淋しい氣がする。

終りに序論について一言すれば自序にも述べられし如く、獨自の見解を以て論述せられたる様であり阿含より始めて瓔珞經に至る迄の推移がよくまとめられてゐる。後進者に益するところ多いと思ふ。

以上妄言を費したのであるが大乗戒の淵源より徳川時代迄一貫して論述せられたるは恐らく本書が始めてであらう。殊に各章の終りに一々その出據を詳細に記される、又附録に圓戒相承の系譜を載せられる如き著者の態度には感謝深きものがある。

本書は序にある如く初學者の爲に上梓せられたものであるからその簡略は致方ないが自卒本書の數倍もあるといはるゝ草稿によつて各章に於ける個々の問題が發表され後輩の爲に示教多

からんことを望んでやまない。

終りに目次を略せば次の如くである。

序論、第一章 戒の意義、第二章 大乘戒の起源及び發達本論、第一篇

第一章 圓頓戒成立への推移、第二章 圓頓戒の成立、第三章 慈覺・智廣・安然の圓戒顯揚、第四章 安然以後の圓戒傳通
第五章 法然上人以後の傳戒、第六章 徳川時代の戒法興隆
第二篇 圓頓戒要論

第一章 圓頓戒とは何ぞや、第二章 所依の經疏、第三章 圓頓戒の相承、第四章 授戒の形式、第五章 戒行、第六章 戒體、第七章 持戒の規範

結論、附録、天台圓敎菩薩戒相承血脈譜、天台圓敎菩薩戒相承師々血脈譜、珍養の廣血脈、立應寺流戒脈、以上（松見）

傳敎大師 鹽入 亮 忠著

傳敎は色々な意味で日本佛敎學上に重要な地位を示めてゐる。従てあらゆる角度から研究をされてゐるが問題は多く殘されてゐる。而も今迄佛敎學者も史學者も共に概して型にはまつた見方をして來た様である。此の時にあたり本書が生れたことは嬉しい。今迄高僧の傳紀も多いが多く讃仰の言葉で充てられてゐる。然るに本書はその見方の啓學的な點に於てすぐれてゐる。即現實的意識を以て書かれたことは傳敎を現實によりよく生かしてゐると言えよう。本書もとより純研究的なものでないから

検討を要する點もある様であるが資料も大抵確實なものによつてなり殊に一心戒文によつて大乘戒壇成立の經過を詳細に叙述せられたる又徳一に關する研究即、三乘一乘の傳教との間に於ける評論の内容を平易に記されたる如きは敬意を表する。

然し空海と對比して「傳教が空海より文化史上特に重要な地位を占めてゐる」云々等の如き又其の他全體にわたつて傳教が空海より勝れてゐるとなす様な叙述の態度が感ぜられるのほどうしたことだらうか。空海も傳教と共に文化史上重要な地位にある。尤も佛教學の上に於て問題を提出したことは傳教の方が多く教學的には或は空海より多方面にわたつてゐると言えるかも知れない。然しそのみを以て文化史上の地位と言ふ如き大きな問題は決定出来ない。傳教は理想主義宗教家として空海は現實主義的宗教家として各々文化史上獨自の地位を占めてなり吾人は敢て其の優劣を論ずる必要もなく又論じたくもないと思ふ。

とまれ傳紀としてその正確なこと叙述の平易且流暢なこと誰でも一讀して傳教の精神を把握すべき良書である。内容目次は次の如くである。

一、生誕と幼年時代、二、少年時代、三、佛舍利的神秘、四、受戒、五、南都の佛敎、六、革新の機運、七、平安遷都、八、叡山の開創、九、願文の制作、十、山上の修學、十一、叡山開創の前後、十二、一切經の書寫、十三、懷疑の解決、十四、法花十講、十五、高雄講經、十六、入唐前の佛敎觀、十七、入唐

求法、十八、歸朝復命、十九、天台宗の公認、二〇、沈黙と修練二十一、建設の第一歩、二十二、徳一との論評、二十三、大乘戒の獨立、二十四、大師の臨終、二十五、滅後の叡山、二十六、文藻書彫刻、二十七、大師の外護者と門弟、二十八、大師の撰述、二十九、結語。

以上(松見)

From the Shin Sect
Edited by *The Eastern
Buddhist Society* 1937

今夏東京で開催せられた世界教會大會出席の外人にして入洛する者に備へんが爲、ザ・イースタン・ブデスト・ソサエテ(東方佛敎徒協會)が編輯した眞宗宣傳用の小冊子で、『眞宗要綱』とも云ふべきもの、四六版七十頁餘。法衣の色を模した黄表紙の假綴、華美な宣傳色を避けた實質本位の内容、編輯、印刷、用紙共に充分の注意が拂はれて居り、世界的な「イースタン・ブデスト」の出版として世に誇り得る立派なものである。

内容に就いて見ると、先づ初に東本願寺の阿彌陀堂及び大師堂を斜に見込んだ一葉のすつきりした寫眞がある。次に大谷伯爵(現法主)夫人の「同朋の歌」が鈴木博士によつて翻譯せられ、この前後に「十八願文」及び「正信偈」「和讃」の各一文が置かれてゐる。次には親鸞聖人の生涯を「御傳鈔」を以つて語らしめた。

御傳鈔は既に同協會の誌上に出て、又佐々木月樵師の「眞宗の研究」にも轉載せられてゐるが、こゝでは所々に改譯が施されて最後の完全譯となつてゐるのを見る。之に次いで「歎異鈔」があり、全部ではないが十章餘りを抜いてゐる。抜き方も亦此の場合適當であると思ふ。歎異鈔は今立吐醉氏の譯を用ひてゐるが、こゝでも改譯が施されてゐる。この改譯の跡を見ると協會は別に新な英譯を試みる用意あるものゝ如くである。次には少し活字を細めて東本願寺の簡略な歴史がピアトリス夫人によつて試みられ好箇の東本願寺紹介文となつてゐる。最後に同本願寺の現狀現有勢力が數字を基礎として語られて居る。ニートな形式で此の内容を以てして定價七十五錢なら決して高くはない。誤植はないやうであるがピリオドが一つ(四八頁)落ちてゐるのと、五四頁に彌勒(Maitreya)とあるべき所が迦葉(Mohakasyapa)となつてゐるのが瑣事ながら缺點か？

「イースタン・ブデスト」協會は曩に拔萃の論集を出した(*tracts from The Eastern Buddhist*, 價三十五錢)。試みばよかつたが校正がわるかつた。然し今度の『眞宗要綱』は満點である。『御傳鈔』が單獨の形で持たれることになつただけでも大いに感謝したい。常に堅實な内容と美しい構文を持ちリズミカルな読み方をさせる同誌が、此の種の單行冊子に迄伸びようとこれ迄しなかつた事は不思議である。文書宣傳を企圖する限り此の種の試みは是非とも今後は折々爲されなくてはならない。此の點ではS.P.C.Kで知られた「基督教智識普及會」や「神智學會」^(Theosophical Society)

に學ぶべきものがあらう。單行冊子となれば雜誌よりも親しみやすく、從つて讀まるべき多くの機會を有することにもなり、國內、國外共に便宜を感ずるであらう。同協會は遠からずして眞宗に關する論文を集めて出版する意圖ありと聞くが、これまでに有能の筆者による眞宗論文(英文)の刊行は極めて少きこと、で、大に期待さるべきものがあらう。(Y)

Haya Akegarasu (ed):

Selections from the Nippon

Leishin Library. 1936.

七人の先覺者(父、母、清澤滿之師、蓮如上人、親鸞聖人、釋迦牟尼、聖德太子)の記念法要出版で、石川縣の北安田から曉島敏師が編纂して出したものであることを知れば、出版の動機から見ても編者の意氣に對しても深く敬意を表したい。菊版一四四頁、價三圓。

内容は、「歎異鈔」今立氏譯、清澤師の「我が信念」、鈴木博士、曉島師共譯。此の他の三篇は何れも曉島師のもの、翻譯で「大和魂」「神を超えた人間」等がある。此の部では英譯の技巧を始終考へさせられた。そしてエリオット譯の「一枚起請文」(法然)と「イースタン・ブデスト」誌上のそれとの比較が思ひ浮べられた。誤植も目につくが辛抱出來ぬ程でもない。「序文」の英譯は本學研究科在學中の弓削須惠彦君となつてゐる。(Y)

Younghusband, F.

A Venture of Faith, 1936.

去年の夏に英京倫敦で開かれた「世界宗教會議」の公的議事録は既に出版せられ、本誌上に紹介した如きものであるが、本書は此の會議の發起者であり議長であるヤング・ハズバンドが個人の立場で會議に關する諸種の事情や、會議に於ける印象感想を述べたもので、「議事録」と共に宗教の現狀動行を知る上には極めて興味あるものである。著者が感銘を深うしたと云ふ七人の講演者の寫眞が各々一頁大に入れられ、印度のシルカルやラーダクリシュナンがその中に見え、最後に鈴木博士がある。あまり似てはゐないが特色はある。著者云ふ「鈴木博士は深みを有する。しかし初から微笑を浮べ、うれしさうである。非常にも静かで、話嫌ひで、體は小柄で、小さつぱりして居り、言葉も動作も共に優雅である」と。博士の「至高の靈的實在」に關する講演だけが特に全文に亘つて引用せられてゐるのも愉快である。全二八七頁。(Y)

昭和
會本 維摩經義疏

校訂者 佐伯 定胤

聖德太子御製作にかゝる維摩經義疏の會本としては本書が

出づる前にも種々あつたであらうが、近くでは明治三十年島田蕃根校正印刷になる會本維摩經義疏六卷がある。近くはこの外にもあるかもしれないが、寡聞にして此を識らない。この明治會本は底本として何を依用したのか校訂者の言がないので、もつと立ち入つて調べなければ解らないが、これには異本數種を集め校訂してゐられると云ふ跡があまり見出せない。唯全卷を通じて二三箇所異本校訂の跡を見ても、前述の如く底本の何であつたか示されてゐない。またこの明治會本末尾に於ける題文に依ると、以前にも會本を出版流布せられた趣が敍べてあるが、誤謬を校正する暇なくして世に出した由であるから、充分なものではなかつたらしい。かう云ふ次第であるから、原典批評の盛んな今の時節にやがて異本校訂の充分に行はれた會本が出なければならなかつたわけである。

昭和會本は現在の凡ての異本を以て校訂してゐる點に於いて高く評價せられねばならぬ。また訓點に於いても従來の誤を訂し、注疏の文章中に出てくる經文はゴシック體に印刷して、讀者の便宜を考慮されてゐる。かつ用紙にも心を配つて特に楮葉が使はれゐる。かう云ふ譯であるから本書は維摩經義疏の刊本としては確に劃期的なものと云つてよく、校訂の勞と云ひ、體裁の工夫と云ひ、並々な努力に對して深甚な敬意を表せざるを得ない。

維摩經義疏の思想内容についてはしばらく措くとして、本書が世に出づるまでの始末は本書の跋文に委しいが、「今也觀世界

趨勢。人心彌危。道心彌微也。識者大憂焉。斷乎深信。若自非屬鑽仰於我天皇之聖訓。體得無我之經旨者。曷能肅正焉」の眞鍮なる信念が本書に結晶せるに外ならないと信ずる。いま學界の耆宿佐伯定胤師より一本を寄贈せらる。記して謝意を表し、併せて佛教學界のみならず廣く江湖の士の座右にお薦めする次第である。(昭和十二年二月二十二日東京森江書店發行、新田)

Rev. Gendo Nakai:

Shinran and His Religion

of Pure Faith. Kyoto. 1937.

著者は本派本願寺の布教史として永年米國に在住せらるゝ方であり、彼の地の人々にして若し日本國民の精神生活に就いて知らんとせば、千三百年來吾が國民精神を培ひ來れる佛教研究の必要を説き、先づその第一歩として現存佛教中の最も有力なる眞宗教義に就いて概説せられしが本書である。されば本書の目的は單に眞宗教義の簡略なる紹介たるに止まらず、日本國民の精神生活の公平なる評價に到達せんと欲する外人に貢獻せんことを希望して居らるゝのである。

本書の内容は二篇に分れ、第一篇に於ては親鸞聖人の傳記を載せ簡明に解説を加へ、又聖人の著書及び言行錄より聖訓を抄出せられてゐる。聖人の教義を述べる下には、1. The Divine Will. 2. The Holy Name. 3. Concerning Faith 4. The

Pure Land. 5. On the Right Attitude towards Deities. の五項に分つて要文を抜萃せられてゐる。

次に第二篇に於ては Anecdotes of Shinran's followers. と題し、聖人の直弟覺信房、本願寺三代覺如上人、佛光寺了源上人、蓮如上人及同時代の本光房了顯、法敬房順誓、教俊、見玉尼、赤尾道宗等の逸話を述べ、以下には妙好人傳によつて、治郎右衛門、九兵衛、石橋壽閑、清九郎、おしも、善兵衛、妙喜尼、七三郎、庄之助等二十餘人の人々に就いて逸話を載せてある。爾來歐文によつて眞宗教義を紹介せられしもの甚だ少かつたのであるが可成りの方面にわたつて而も通俗的に述べられた本書の出現は何らかの反響を興へ得るものと思はれる。

全體に平明に記されて居るから聖人の生涯及妙好人の逸話等は一讀領會せらるゝであらうが、親鸞聖人の教義の抜萃即ち、本願、名號、信心、淨土等に關する聖人の幽遠な教義は單に引用せられしのみにては會得しにくいこと、思はれる。慾を言へば簡略なる説明が欲しかつた。併し聖人の教理に何らの媒介なしに觸るゝは却つて得るところ多からんかとも思はる。本書の讀者は妙好人の逸話より日本國民の中に生きた佛教を味はひ得らるゝやう希望する。最後に丁寧なる索引が附記してある。

(G・K)

(四六版二百六十頁。發行所、京都市右京區山内御堂殿町、眞宗學研究所、貳圓)